

衝動的で乱暴な言動の多いM児とともに

～～児童理解を中心として～～

足利市立三重小学校 大沢政子

1 はじめに

春の息吹きがいっぱいの校庭に、子どもたちの嬉々とした姿を見たのは丁度1年前の4月だった。新学年を迎えた子どもたちの明るい表情の中に、笑いも見せず無表情なぐりぐり頭の男の子が強く印象に残った。それがM児である。

2, 3日後、掃除中奇声を発し、モップを振り回している姿を見た。名まえを呼んでも知らんぶりで、そばへ行くと逃げ出してしまう。更に3日後、荒々しい言葉を耳にし、近づいて行くと頭に手をかざし身をかわした。はたかれるとでも思っているらしい。おびえている感じもする。何がM児をそうさせるのだろうか。

さいわい、先年度から、児童指導の研究校として研究する機会にも恵まれたので、その原因をさぐり、多少なりとも援助の手を差し伸べることができたらと思い本児の指導に取り組んだ。

以下、本児と共に歩んだ事例の一端を述べ御指導を仰ぎたいと思います。

2 本人の概要

- (1) 本 入 M・S 9歳 男
- (2) 学業成績 下、ごく簡単な読み書きができる程度。特に算数が劣る。
- (3) 学習態度 注意散漫であきやすい。授業中大声を出したり、隣の子に話しかけたりする。
- (4) 交友関係 爭いが多く、友だちが少ない。
- (5) 生育歴(母親の話より)

赤ちゃんの時は世話のかからない子だったが、3才の時、近所で寄り合があり、そこで卵を盗んで食べ、父親にひどく叱られた。4歳の時、友だちに誘われて近所でいたずらをし、父親から殴られたりけられたりの暴力を受けた。5歳ごろから低学年までは、ひとりで外出することを禁止され、兄弟だけで家の中で遊んでいた。

(6) 問題行動(反社会型)

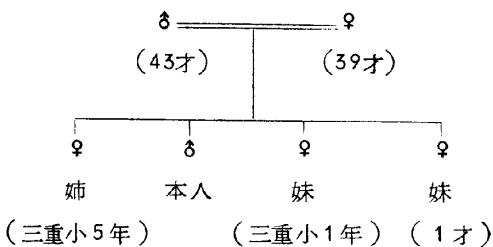
- ① すぐかっとなり暴力をふるう。
 - ・何もしない女の子や弱い者に対してパンチやキックをする。
 - ・友だちとのけんかが多く、興奮すると目つきがするどくなり乱暴をはたらく。
- ② 言葉遣いが悪い。
 - ・日常の会話ができず奇声を発する。
 - ・おめえ、てめえ、バカヤロー、くそばばあ、あかんべ、くそったれ、ぶつとばすぞ、ぶっころすぞ、きさまなどと荒々しい言葉を使う。
- ③ 集団生活に適応できない。

・きまりが守れない。

・外での友だち遊びができない。

- ④ 落ち着きがない。時にはうそをついたり盗みをしたり、拾った物を自分のものにすることもある。

3 家庭の状況



父……小学校中退、工具

仕事においてはいい腕を持っているが、気分屋で、やりたくないとき会社を休む。同僚と大げんかをしたこともある。読み書きができない。本児に対しては、殴ったりけったりし、対話を持とうとしない。（若い時精神病院に入院）

母……中学卒

子どものことは心配しており、見慣れない物など所持しているとすぐ連絡してくる。子どもの言うことはうそだという先入観があり信頼していない。暴力はあるわないが言葉が荒々しく悪いことをすると刑務所へ入れるとおどしている。

4 調査・検査からわかったこと

上記の実態から、本児の問題行動の要因の大半は、家庭における人間関係およびその養育態度にあると考察された。そこで、これらをさらに客観的に明らかにし、指導の手がかりを得ようと思い各種の調査検査を実施してみた。次に調査検査からわかったことの概要を述べてみたい。

- (1) 教研式知能検査 偏差値 19 (昭 49. 6)
- (2) WISC IQ 68 (言語性 73 動作性 72) (昭 50. 11)
- (3) Y・G 性格検査 E型(不安定消極型) (昭 50. 6)
- (4) 親子関係調査 拒否型、厳格型、不一致型、矛盾型(いずれも 0 %) (昭 50. 7)
- (5) パウムテストから(6月と12月に実施)

6月の絵からは不安、注意散漫、衝動的、興奮性が読みとられ、これらはすべて本児の行動と一致している。12月の分析結果も6月と同じようだったが、快活といいう面がプラスされた。2学期は友だちとの遊びもできるようになり、今までより明るくなつたことがパウムテストにも表現されたのであろう。

- (6) 描画診断法(H・T・Pテスト) (昭 50. 11)

家屋画からは、暖かい家庭に母親と住みたいと述べており、本児の内心がうかがえた。

樹木画では、樹木を父親にみたてており、大きくて強くこわい人物と感じている。分析では、

興奮しやすく衝動的で外界の力によって動かされ、敵意をもっていることがわかった。

男性像は、目をぬりつぶし、歯を見せ、腕を振りあげているのに対し、女性像は全く反対であった。女性像から、女性に対してはあまり問題がないように思える。男性像の分析からは、家屋画、樹木画と同様に、外界への敵意を持ち、きたない言葉を用いて敵意を行動に表わし、攻撃的反抗的行動が著しいことがわかった。

以上を総合すると、本児の問題行動と分析結果が一致していることがわかる。又、暖かい家庭に母親と住みたいと望んでいることや、外界への敵意を持っている点は、まさに本児の内面の表われだと思う。これらは、H・T・Pテストを実施して初めてわかったことである。しかも、外界というのは父親のことである。父親に対して敵意を持っているのではないだろうか。それは、日常生活において父親から暴力を受けている本児なので心の奥にそのような気持ちがひそんでいたのであろう。

5 問題行動の要因と思われるもの

(1) 愛情の不足

両親共に「この子は悪い子でちっともかわいくない。この子には物を貰ってやるのもおしい。」と言葉にして言っているほど他の兄弟との差別がはげしい。親子関係調査でも拒否的傾向を示していることから、本児に対する愛情が不足しているようだ。従って、注意をひこうとしたり、親の愛情を確かめようとして問題行動が発生するのではないかだろうか。

(2) 親の養育態度

生育歴から、外での遊びを禁止され、家の中だけで兄弟と遊んでいたことがわかる。このことから、社会性が身につかず、友だちとの会話、遊びはもちろん、集団生活にも適応できないのではないかだろうか。

(3) 描画テストから

父親に対して敵意や反感を持っていることがわかった。この敵意や不満のうっばんをはらそうとして、攻撃的、衝動的な行動を起こしているのではないかだろうか。

6 指導方針

- (1) M児の気持ちをよりよく理解し、共に歩むことによって何でも話せる雰囲気を作つてやりたい。
- (2) 友だち相互の関係を深め、よりよい関係を育てたい。
 - ・友だちと仲良くできるように受け入れる集団を作つてやる。
- (3) よいことを称賛し、認めてやるようにしたい。
- (4) 家庭との連絡をとり、親との面接や協力をお願いする。

7 事実の記録と指導の経過

1 学期

—— 亂暴 ——

女の子が3、4人「キャーキー」さわいで走つて来た。「どうしたの」と聞くと、何もしないのにM児が追いかけて来て、おなかにパンチやキックをするというのだ。ふざけてやつてゐるのだろうと思ってM児の方へ目をやると、鋭い目つきで「バカ、バカヤロー」とどなつてゐる。男子は

全員外へ出て遊んでいるのにM児だけ室内に残って女の子に乱暴をしていたのだ。注意すると、口をとがらせ、ぶつとふくれて教室から出て行った。

—— けんか ——

「くそこのバカヤロー」「なにー」朝礼の後のことだ。荒々しい言葉に後ろを振り向くとK君と取っ組み合いのけんかをしている。目がつり上がり、顔色が変わって、胸がドキドキしている。このままでは危険だ、すぐ引き離し、M児の手を握り玄関の方へ向かう。興奮していて思うように歩けない。「先生の荷物があるので持つのを手伝ってね」とやさしく促したら、こっくりしてついて来た。教室までの道々、話しかけたが一言もしゃべらない。その後も他の子とのけんかが何度かあり、その都度かっとなり暴力を振っていた。

—— 家庭訪問 ——

訪問するなり「先生、うちの子はばかで何もできないだろう。どうしょうもなかんべ」からはじまって、悪いことばかりしていること。うそや盗みをすること。父親は棒ではたいたり頭を殴ること。小さい時、近所で悪いことばかりしていたので外で遊ばせないことなど一方的にペラペラ話した。

過去のことや、今までの先入観にとらわれすぎている印象を受けた。小さいころのことにはだわらないで、よい所を見つけてほめるよう助言した。

—— 落書き ——

母親出産のため入院中のできごとだったが、登下校する道路にあるガードレールにマジックで落書きをしたことが同じクラスの子からの連絡でわかった。すぐ家庭訪問し、夕方から2時間かかって兄弟と一緒に消した。真剣に消したM児をほめ、今後のことを注意し、あんどの胸をなで下ろしながらM児の家を訪れると、父親はいきなり本児を殴り、大声でどなった。この光景を見て私は、そんなことではいけないと知りつつもただあせんとするばかりだった。

1学期が終了した。M児の言動に振り回されたかの如く、私とM児とのラポート作りもできぬまま夏休みを迎えることになってしまった。現象面にのみとらわれて現象をなくすことだけにあくせくし、説諭や訓戒じみたことばかり言ってしまって、そうしなければいられないM児の奥にひそんでいる気持ちを受容してあげられなかった。早くなんとかしなければというあせりがあったとともに事実である。

2学期

期待と不安で本児に会う。キヨロキヨロと落ち着かず女の子にいたずらをしている。私がそばへ行くと逃げてしまう。新しい教科書を運ぶのを手伝ってもらい、はりきってやっていたのでほめた。

—— 遊戯室で遊ぶ ——

部屋に入るなり目をくりくりさせて「すげえ」と第一声。「何を使ってもいいのよ」の声に次から次へと手あたり次第におもちゃをいじりまわす。「ぼくもこれ持っている」（うそ）とか「玉がたくさん出るよ」「あゝおもしろいおもしろい」「ダダンダンダン」など大声をはり上げて遊び始めた。しばらくして、私と撃ち合いをする。私が「やられた」と机の下に倒れると満足そのもの。

無表情な顔が一瞬生き生きとほころび、私も何とも言えない満ち足りた気持ちになった。ライフルと機関銃を特に喜んだ。一つの遊びは長続きせず30秒位で次の遊びと交代していく。

遊戯室での遊びはその後3回続いた。回を重ねるごとに一つのおもちゃで長く遊べるようになつた。最初のころは、ライフルや機関銃を必ず使っていたが、だんだんゲームなどするようになつた。私とオセロをした時は、かなりじょうずだった。「すごくじょうずだね」とほめたら「ほくやつしたことあるんだ」と得意満面の顔。1学期には見られなかつた明るい顔だ。

——遊び・仕事——

遊戯室での遊びと並行して、つとめて本児と遊んだり話したりする機会をもつた。ある時はじょんけんでおぶいっこ。「グリコ・チョコレート」など汗をかきかき私をおぶってくれた。へび鬼をした時は遊び方を知らない。手をつないで一緒に走った。他の子どもたちからも「M君しっかり」の声援がわいた。外で何回か遊ぶうちに自ら進んで友だちと外へ出て遊べるようになってきた。その都度遊んでくれた友だちやM児をほめた。

このころから、給食時のゴミの始末や係活動なども喜んでやり始めた。よい子ノートを作り、どんな小さなことでも知らせるように努めた。

——なやみ——

私が内心喜んでいた矢先、2つの問題が起きた。

1つは母親が来校し、家にいるとあくたればかりついていて手がつけられない。このままだと将来が心配だから、どこかの施設に入れたいという相談。もう1つは腕時計を拾ってきたというのである。私も初めての経験だったので相談係のT先生に事情を話し指導を仰いだ。初めの問題は、母親との面接をしてくださることになった。腕時計の件は、私が母親と話をしている最中、自分の腕にしていた腕時計を見せて、これはMが拾って来たのだと言ったのである。子どもの拾って来た物を母親がちゃんと腕にしている状態を目のあたりにしがく然とした。このような家庭の中で生活しているM児は、毎日どんな気持ちでいるのであろうか。

——母との面接——(3回続く。それ以後自然に来校しなくなる)

小さいころから父親に乱暴されているM児のこと、他の兄弟との差別がはげしいことなど話された。父親の前では怖くて何も言えず小さくなっているが、父親が出掛けるといばりちらし、母親にあくたればかり言って困るなど。3回共父親のことが中心だった。

父親の態度に問題があり、本児との関係も根深く、根元から直さなければならないようだ。あくたれなどは言いたいだけ言わせて、じっとがまんしてみると大切さをT先生より助言された。

——集団作り——

母の面接と並行して、友だち関係をよりよくしようという方針から、集団の中でのつき合い方を学ばせようと試みた。交友関係をもとにグループを編成したり、ドラフト式にしてグループ編成をしたりしてよりよい集団の中でM児を育てたいと考えた。グループの協力で足利めぐりの発表では代表として発表することができた。更にクラス全員の協力で、休み時間や放課後など、生き生きとしたM児の姿を見ることができるようになった。

——ラポートができた——

10月も末のことだ。庭掃除をしていて遠くから私の姿を見て「先生」と声をかけた。更に放課後私に握手を求めてきた。手を強く握ってあげた。

翌日、又そばへ来て握手とさようならを言った。個人でさようならが言えたのも初めてである。

1週間後。昼休みのことだ。椅子に座っていた私の肩のあたりがどうもくすぐったい。見るとM児が後ろに来て肩をたたいているのだ。胸がジーンとなり。思わず「ありがとう」とだきしめた。

—— 父の変容 ——

11月。月曜日のことだ。きのうの日曜日に家族で食事をして来たと話に来た。家族全部での外食は初めてだとのこと。とても嬉しそう。「よかったね」と声をかけた。

早速家庭訪問し、嬉しそうに話したことを報告した。今まででは陰の方にいた父親もにこにこ顔で出て来た。時には遊び相手になってあげるよう話す。

—— よいこと ——

12月に入り、悪い遊びに誘われても断ったり、鉛筆でおしりをつつかれたけどがまんしたなどとグループ日記にも書かれるようになった。又、K君が道路に落書きをしたのを見て消すのを手伝った。これなど7月の落書きとはまるで逆である。その都度ほめたり励ましたりした。早速よい子カードに記入された。

—— 盗み ——

12月半ば、母親の来校でMの様子がおかしいことを知らされる。笛を拾って来たと言っているがどうも誰かのを持って来たらしるので届けに来たとのことだ。父親が1週間ばかり仕事をさぼつて休んでいるので、叱られたりしてMが荒れているというのだ。

翌日S君のカバンにつけてあったキーホルダーが紛失しM児が持っていた。

相談室でM児の気持ちを聞く。しばらく話し合っているうちに、笛は友だちの机の上にあるのを持って行き、キーホルダーは友だちにあげようとしてとったと言う。正直に話せたとほめ、人の物をとることはいけないことを注意する。

—— 反省 ——

12月末。2学期のクラスの十大ニュースでは、M児がよい子になったと書いた子が4人いた。
11月からのよい子カードは8枚たまっていた。

M児の反省より　　ぼくのよくなつたこと

みんなといっしょに遊べるようになった。

すぐあやまれるようになった。

おかあさんの言うことが聞けるようになった。

M児の日記より　　（「先生日記書いてきたよ」と持って来た。見ると3頁位書いてある）

きょうA君とN君とM君と妹とぼくで遊びました。はじめにドッジボールをして遊びました。そして、リレーをしました。はじめ5人でかけ足をしました。1ばんはぼくでした。（中略）そして、A君とN君と妹は、すべり台からとびおりたので、ぼくはあぶないと思いました。すべり台からとびおりるのはとてもあぶないのでやめようね。これからは、すべり台であそんでもいいから、きけんなあそび方はやめようね。（続く）

全員の前で読んでやり、じょうずに書けたことをほめた。言葉遣いもていねいで落ち着きのある文になってきた。

8 今後の見通し

1学期当初から見ると落ち着きも出てきて、明るい子になり、反だち遊びもできるようになってきた。しかし、まだ、プラス面とマイナス面の繰り返しが見られる現状である。幼少のころからの父親との関係が深い根底をなしているので、短期間には容易に変容できないだろう。今後も本児に対しても承認、称賛を多くし、暖かい気持ちで接し、両親に対してはよいことを知らせるように心掛け、両親との話し合いを続け、長期にわたる援助をしていきたい。

9 終わりに

多くの問題行動を持ったM児。そばへ寄ると逃げるようなM児。このM児と仲良くなれるだろうか。この行動が変容するのだろうか。最初はそんな不安でいっぱいだった。しかし

どんなによくないことをする子どもも、生まれながらに悪なるものはない

——ニイル全集「問題の子どもより」——

この言葉を信じ、励まされ、遠くに見える小さい明るい“ともしび”を頼りに牛歩ではあるが1歩1歩前進できたような気がする。

援助の面では系統性、計画性がなく、その場その場での指導に終わってしまったことを反省している。しかし、何より嬉しかったのは、M児との心の触れ合いができる仲良しになれたこと、M児に対するクラスの友だちの励ましや暖かい思いやりが見られるようになったことである。本児をとりまく人間（教師、友だち、両親など）が、本児の感情（心）を理解し、肯定的な見方に変容することにより、本児の行動も少しずつ変化したようだ。

以上本児と共に過ごした1年を振りかえり、本校児童指導の基本的態度にかけられてきた「児童個々の現在をよりよく理解し共に歩む」ということの大切さを身にしみて感じている現在である。

評

本実践記録にある衝動的行動や乱暴な言動の多い児童は、どの学級にも数人はおり担任は連日その指導に苦心していることと思う。本実践は、これらの児童と共に歩むということを根本理念にすえ、そうあるために、客観的な児童理解に努力していることは特筆に値することである。ややもすれば、乱暴な児童を批判的にみたり、迷惑に感じたりすることもあるやに聞く時、実践者が、児童と“共に歩む”ことに徹し、そのため教師自らの変容に絶えず努力して来た姿勢には敬意を表したい。

低学年児童の客観的理解のむずかしさは、教育界にとっての一つの課題である。実践者はそれを親子関係調査、パウム、テスト（樹木診断法）描画診断法等の投影診断法を活用し児童理解をはかったことは、多くの教師の参考になると信じる。実践者が最後に述べている、「児童個々の現在をよりよく理解し共に歩む」ということばを味わいつつ、児童と共に歩める教師になりたいと思っている。